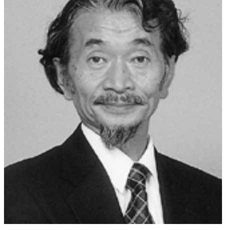
関西学院高等部ニュース
K.G.H. REVIEW
MASTERY FOR SERVICE
2010年 2月 18日
第34号
発行　関西学院高等部
住所　〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原

高等部長メッセージ　選びに応えて

高等部長　澄田　新



二〇〇九年夏、私はある感動を覚えました。それは、八月一七日、甲子園の二回戦で高等部野球部が、中京大中京高校に敗れた時でした。

中京大中京高校との闘いぶりは、本当に爽やかなもので選手は全力を尽くして闘いました。敗れた瞬間、グランドにうつぶせになる選手、天を仰ぐ選手、しかし、すぐホームプレートに戻って来ました。そして、勝ったチームの校歌が流れている間、敗れても堂々と胸を張り、勝者を称えている。私はこの姿に感動を覚えたのです。この姿こそ、関西学院スピリットそのものでした。

歴史と伝統の中で、先輩から後輩へと、身を持って伝えられてきたことを、本当に大切な時に示すことができる、これが大切です。あの時、高度に洗練された姿を、自然に選手一人ひとりが示したのです。そして、このスピリットを甲子園で応援した高等部生が、心と体で学び取ったのです。

私は五年前、『武士道』（新渡戸稲造著）を、高校三年生の選択授業で生徒たちと読み、学びました。江戸時代士農工商という階級制度の中で、上層階級の武士たちが作った厳しい規範の武士道は、武士の本来の戦士としての役割がなくなっていた時代、また、武士の存在意義が薄れつつあった時代に出来上がりました。

ところで、「江戸しぐさ」（仕草、思草）という言葉を知っていますか。最近よく言われるようになったので、知っている方も多いと思います。「江戸しぐさ」とは、江戸時代の商人道で、口伝により各商家に伝えられてきたものです。近年になって、現代にも通用することが知られ、注目されている言葉です。

江戸時代、階級制度で最下層であった商人たちが、武士道という規範を持っていた武士階級に、優るとも劣らない規範を持ち、生活していたのです。武士道を持っている武士階級と共存し、商人は商人の生き方、生活の仕方を作っていたのです。

江戸は、徳川時代、百万人を超える大都会でした。この大都会で生きていくために、商人は商人たちにも何らかの規範が必要でした。そこで考え出されたのが、「江戸しぐさ」と言われる商人道です。よく知られているものを紹介します。

「七三歩き」　狭い道の真ん中を歩くのでなく、道の三割を歩き、残り七割を他の人のためにあけておく。

「傘かしげ」　雨の日に、お互いの傘を外側に傾け、濡れないようにすれ違う。

これらの「しぐさ」は、一見なんでもないように思いますが、その何気無さの中に、そっと規範が忍ばされていることが分かります。人としての在り方を、さりげなく言葉に込めています。

この言葉は、商人たちが、生きて行く中で、学んだ知恵や、人として大切にしてきた歩みを、洗練された言葉として、生き方として残してきたのです。商人たちの息づかいを感じます。

甲子園に出場した選手一人ひとりの姿は、「江戸しぐさ」ではありませんが、関学スピリットそのものでした。この生き方を、高等部は大切にしていきたいと願っています。

野球部 70年ぶり 夏の甲子園へ

超満員・大歓声のなか熱戦繰り広げる

関西学院高等部にとって、忘れられない夏になった。史上最長という七十年のブランクを経て、関西学院が夏の甲子園に戻ってきた。真夏の太陽が照りつける甲子園に超満員の観客がつめかけ、たくさんの笑顔と歓声がスタンドを埋め尽くした。そして、今も昔も変わらぬオール関西学院の熱い想いを胸に、大観衆がひとつとなって歌い上げた地響きのような校歌「空の翼」もまた、関西学院に繋がる者全ての心を震わす強烈な想い出となった。

秋季大会ベスト８の実績と春季大会での東洋大付姫路との熱戦を経て、チーム状態もよく、上昇ムードで夏の県選手権を迎えた。県大会の組み合わせは、強敵ぞろいで、初戦の三木北戦から緊張した試合となった。そして、五回戦で強敵・報徳と対戦。ただ、秋の練習試合を接戦でものにしていただけに、ある程度の自信はあった。試合は予想通りの接戦。相手の守備のわずかな綻びをつき、きめ細かい攻めを続け、リードを奪う。全員がノーエラーで守りきり、相手の反撃を抑え歴史的な勝利を挙げる。実に夏に報徳に勝ったのは、六十一年ぶりだ。

実力を秘めたチームに、勢いが増す。その先の準々決勝は、ここ数年安定した戦いをみせる神戸弘陵だったが、接戦をものにし、いよいよベスト４。

ここで今大会本命の神港学園が準々決勝で滝川第二に敗れた。その激戦の影響で変更された先発投手の緊張につけ込み二点を先取。それを完封リレーで守りきり、決勝進出。決勝の相手は育英。九年前の決勝の再現だ。その経験がここで生きる。競り合いに焦らず、腰を落ち着けて最後まで戦えた。見事な逆転だった。球場の後押しを受け、様々な追い風を受け、七十年ぶりの奇跡が起きた。

七十年ぶりの伝統校復活は、様々な新聞やテレビで全国へ伝えられ、多くのＯＢの方々からもたくさんのご声援をいただいた。

学校でも急遽、応援体制について準備が始められた。ほとんど初めての経験で、限られた時間のなか、「一生誇れる応援を」という想いのもと、アルプススタンドを青く染め、そこに黄色の三日月を浮かび上がらせる人文字が計画された。

八月八日に開幕した第九十一回大会。開会式の入場行進で関西学院メンバーが受けた拍手と歓声は、どこよりも大きかった。生憎の悪天候で、試合日程の延期が続き、関西学院の初戦は十二日第一試合となった。

初戦の相手は、強敵の山形県・酒田南。大会初となった満員の甲子園、アルプススタンドには中学部・高等部の生徒、教職員、保護者、ＯＢのほか、メンバー以外の野球部員、さらに大学のチアリーダーや啓明・仁川・報徳の吹奏楽部も応援に参加してくれた。苦労した三日月の人文字もきれいに浮かび上がった。

試合は、関西学院が先制し、追い上げられつつも十三安打七得点で、酒田南を振り切り、見事な勝利。試合後には、甲子園球場一杯に、歓喜の校歌「空の翼」が響いた。

続く二回戦は、十七日第三試合、相手は優勝候補の愛知県・中京大中京。初回から二点を先制されるも、メンバー全員で食らいついた。三回に同点に追いつき、四回には勝ち越し。その後再び二点リードを許すも、九回に再び同点に追いつき希望をつないだ。スタンドのボルテージも最高潮、しかし九回裏、鮮やかなサヨナラホームラン一球で劇的な幕切れ。その時の甲子園は、何とも言えない空気が支配していたが、試合後には鳴りやまない拍手が、関西学院のメンバーを包んでいた。

捕手と投手を兼任しチームの命運を一手に背負った山崎裕貴をはじめ、まさに全員で優勝候補と互角に戦ったその激闘は、関西学院ここにありというメッセージを強烈に伝え、多くの人にひたむきさや気迫、そして清々しさを残してくれたことだろう。

甲子園を終えて

主将　窪　大介

甲子園を終えて、最高の経験ができ、あらゆる面で本当に成長できたなと感じます。それは甲子園に至るまでの過程や高校野球生活を通して野球に関する技術はもちろんですが、チームワークの重要性や意思の疎通の大切さといったことでした。百十三人の部員全員が「甲子園」という同じ目標、同じ方向性を持ってレギュラーやベンチ入りメンバーだけでなく全員が日々の努力を積み重ねたことが甲子園出場に繋がったのだと思います。悩んだことや苦労した日々もありましたが、七十年ぶりの甲子園出場という最高の形で締めくくることができ本当に感謝の気持ちでいっぱいです。こんなに熱く長い夏にすることができたのは、多くの人の支えがあったからこそだと思っています。練習試合や遠征での運営をして下さった保護者の方々、遠方でも応援にかけつけて下さったOBの方々、甲子園の応援などの運営をして下さった高等部の先生方、そして広岡監督、芝川部長をはじめとする指導者の方々、これまでお世話になり本当にありがとうございました。

監督　広岡正信

まず第九十一回全国高校野球選手権大会出場に際して、皆様からいただいた温かい物心両面のご協力に感謝したいと思います。

窪主将を中心によくまとまり、抜群の集中力を持って戦い続けられたというのが、今の率直な気持ちです。石井前主将からバトンタッチされた当初は、力はあるものの、なかなか完全燃焼しきれないもどかしさが常にありました。それが、冬の基礎練習と春の実践練習を重ねていくうちに徐々に成熟していくのを肌で感じました。五月六月をうまく乗り切り、チームの形ができあがり夏を迎えられました。

一気に夢の舞台に駆け上がり、甲子園の晴れ舞台で気持ちよく全力でプレーできたことに、改めて感謝したいと思います。私自身は、驚くくらいに自然体でいられたのですが、超満員の甲子園の真ん中で受けた応援と歓声は、心強く、やさしく、勇気づけられたことを鮮明に覚えています。もちろん選手たちの活躍は嬉しいのですが、それを可能にしてくれた舞台裏がなによりも素晴らしかったと感じています。至るところで支えられていることを感じました。このような学校は出場チームで間違いなくトップであったと思います。学校関係者のきめ細かい配慮を心に刻み、御礼の言葉としたいと思います。ありがとうございました。

ふぅりん

「私学に勤めて何が変わったか」公立高校に勤める元同僚からよくそう聞かれる。答えは、「どうしたら自分の学校がいい学校になるかを朝から晩までずーっと考えるようになった」さらに「日本の社会全体が私たちの目指す学校みたいになったらいいのにと考えるようになった」そう言うと、相手はきまって目を白黒させ、冷笑あるいは絶句する。

だが私は大真面目である。来るべき未来の社会の先駆的形態をめざして、今自分が所属している組織のあり方を考えるのは私には当然のやりかたである。

あの日、私たちは炎天下のプールサイドにいた。雨天順延で、甲子園の初戦と関学水泳部主催の試合が重なってしまったのだ。今は携帯で野球中継が観戦できる時代である。試合の手伝いと応援をかねてやって来た三年生が審判長席にいる私のもとに飛んできた。「勝ちました！」そのとき試合のアナウンスを担当していた他校の女子生徒が私にささやいた「先生、それ、通告していいですか？」「うん、頼む」そして「試合中ですが・・・」と関西学院高等部野球部の甲子園の勝利が告げられ、試合会場は大きな拍手と歓声につつまれた。やがて会場整理と応援で甲子園に行っていた三年生部員が戻って来て、何事もなかったかのように試合の手伝いをしてくれた。

三年生の諸君、卒業おめでとう。諸君はこれから社会に出てゆく過程で、しばしば高等部での生活を思い出すことになる。「あのときおれはなぜあんな行動をしたのだろう」という形で。それはこの三年間が君たちにとってきわめて濃密であった証である。「ずーっと考えて」いたのは私だけではない。君たちもそうだったのである。

文化祭
新型インフルエンザを乗り越えて

文化祭執行委員長　池田　稜

第六十一回目となった今年の文化祭はすごく濃密なものでした。文化祭の執行本部は、一学期中に組織されて今年の文化祭の方向性を考えたりで夏休み前からあたふたしており「文化祭は大丈夫か？」のような感じにさえなっていました。そんな中で出てきた今年度のスローガンが「Ｓｐｌａｓｈ　ｙｏｕｒ　Ｃｏｌｏｒ」でした。生徒皆の自分らしさを出して二〇〇九年度の面子でしかできないこの年のＣｏｌｏｒ（特徴）を出そうとなりました。ですが、一次企画書などの提出をなかなかしてくれないクラスなどもあって大変でした。

夏休み中にも執行委員皆で集まって文化祭を良いものにしていこうとずっと話し合い先生たちにも助言をいただいて合宿も行いました。この合宿で文化祭の大まかな流れと方向性を確立しました。

二学期にもなると文化祭がいよいよ迫ってきて文化祭執行委員会を作り文化祭の準備が本格的にはじまりました。スローガンにＣｏｌｏｒという言葉があることから今年のクラス旗は、各クラス虹色の内担当の一色をメインにそれぞれ個性溢れる旗が二十一個できました。どれも甲乙つけがたい出来栄えでした。その後中間テストを挟んで文化祭準備期間へと移って行きました。文化祭準備期間になると本部も執行委員も関係なく皆夜遅くまで残ってそれぞれの担当している仕事に没頭したり手の足りていないところの手助けをしていました。また、クラスやクラブなどの人々も続々と延長手続きなどをして文化祭に向けて準備していたのを覚えています。そして、コンピューター部のみなさんが中間試験間近でもより遅くまで残って作ってくれたパンフレットも届き全てが順調に進んでいました。

そんな順調に進んでいた中で浮上してきた問題が新型インフルエンザによる中止の可能性があるといったものでした。今年度では、世界中にインフルエンザが蔓延しており関学内でも感染者が多発していたためでした。それによって前日まで文化祭が行われるかどうかはわからない状態になってしまいました。そんな中でも文化祭執行委員も学校の皆もやる気をなくさずに一生懸命文化祭の準備をしてくれたことは、私にとっては大変うれしいことでした。結果としては、ライブハウス・チャペルステージと映画が中止になってしまい規模が縮小されてしまいました。それでも私は、今年の文化祭は、皆が個性を最大限に出せた素晴らしい文化祭だったと思います。

2009 学友会報告

学友会長　西村脩平

学友会も新しい世代へと変わり、もう卒業という時期になりました。二〇〇九年度の学友会は、「前年度の土台を生かして更なる発展をしていこう」というスタンスで活動してきました。春の合宿ではスローガンが決まらなく、朝方まで話し合って、それでも決まらなく、次の日やっと決まりました。そのようにして生まれたスローガンは、『意思の加速～君の納得できるゴールへ～』でした。学友会活動や部活動、習い事など、どんなことにも、ただ成長していくだけじゃなくさらにアクセルを強めて高い意識でやっていこう、そんな思いが込められたスローガンです。この一年間は良い意味でも悪い意味でもイレギュラーなことが多かった一年だったと思います。良いこととは、野球部の七十年ぶりの甲子園出場という出来事です。この甲子園出場が、僕の夏休みを、いや関学ファミリーの夏休みを〝熱く〟させてくれました。僕ら学友会は、アルプススタンドの応援の統括（人文字で三日月を作ったこと）とグッズ配布の手伝いをさせていただきました。先生方もバタバタしていて、断水&冷房もストップという蒸し暑すぎた日にも、先生方とああだこうだと言いながら準備をしてたのを思い出します。一回戦、酒田南に見事勝利し、甲子園球場で空の翼を声高らかに歌えたことは、本当に嬉しく最高でした！二回戦、九回表に優勝校中京大中京に追いついたときは、まさにアルプススタンドを含めた関学ファミリーが一つになった瞬間だったと思います。野球部のみんなにもう一度、ありがとうと言いたいと思います。

悪いことは、新型インフルエンザの流行です。総会と文化祭という、学友会の二大行事に影響を及ぼされました。高等部では、文化祭直前に感染がピークとなり、文化祭の開催自体が危ぶまれました。しかし、そんな中でも執行委員中心となり前向きに準備を続け、（残念ながら一部縮小はあったものの）文化祭を成功させられたことは、本当に嬉しく達成感でいっぱいでした。

この一年間、嬉しいことだけじゃなく、辛いことも悲しいこともたくさんありました。それは、僕だけじゃなく、三年生みんなが感じていることだと思います。一人ひとりが、なにか〝熱いもの（気持ち）〟を持って生活してきたからこそ、今こうして成長できているんだと思っています。これから、新しい生活がはじまります。僕たち三年生は、周りの人や環境に感謝することを忘れず、これからも日々『意思の加速』をしていきたいと思います。ありがとうございました。

70年ぶりの甲子園出場
アルプススタンドから

学友会本部役員　内藤兵磨

二〇〇九年、夏。関西学院は激戦区と言われる兵庫県予選を勝ち抜き見事夏の甲子園出場を果たしました。

甲子園出場が決まった日から、グッズ、チケット販売、応援練習はどうするかを先生と協力し合って何度も話し合いました。毎日毎日学校で会議を行い、シミュレーションもしました。また生徒に学校に来てもらって壮行会などをしたり野球部と協力して応援練習を繰り返しました。

初戦当日、第一試合だったため、朝早くから甲子園に行きいろいろと準備をしました。地元校だからか、朝早くから当日券を買いに来る人でいっぱいだったため先生と連絡を取り合い、生徒を誘導して入場まで待機していました。入場してからは各自自分のポジションでひたすら待機して指示を待っていました。私はアルプス席を黄色に染めた三日月がうまく映えているかどうかを相手側の外野席まで走って行って確認する役も果たしました。エールを交歓し合って、いざ試合が始まると鳥肌がたったことを今でも覚えています。とにかく応援はみんな一丸となって必死でした。ちょっとでもいいからプレーしている選手に気持ちを伝えるため、みんな大声を上げて最後まで応援してました。得点が入るたびにに盛り上がる一塁側アルプススタンドは衝撃的で、みんなが笑顔になり大歓声でした。また試合の結果の方は七対三で見事勝利し二回戦に進出しました。

一回戦を突破しても、気を緩めることなく、また会議が始まりました。一回戦よりいかにスムーズに動けるかを考え、何回も話し合いました。二回戦は強豪愛知県代表の中京大中京でした。みんなが協力し合って一回戦同様三日月のマークを作り大応援で応援しました。シーソーゲームを繰り広げ、ハラハラドキドキの試合でした。結果はサヨナラ負けで負けてしまいましたが、とても感動しました。役員をやっていて、本当に良かったと思える時間でした。

◆エコ部報告◆
間伐材を有効利用

エコ部　高橋航司

エコ部では丹南市山南町で森林学習、製材体験をおこない、持ち帰った間伐材を有効活用してテーブルとイスを作成した。この体験を通じて、様々なことを学んだ。京大農学部の方には手入れの行き届いた森と、放置された森を見せていただいた。前者は日光がよく差して明るく、木の幹も太かったのに対し、後者は暗く、木も弱く細々としているのを目の当たりにし、「森が健全に育つには人の手が必要不可欠なのだ」ということを改めて実感した。今、間伐材の需要の低下や、林業従事者の減少等により、間伐が十分になされなかったり、切ったまま放置される森林も増えており、今回のエコ部の活動は非常に有益だったと思う。

実際に作業を行う上でも、夏休みに招集をかけて皆をまとめるのはとても難しかった。人をたくさん集めても、一人一人にきちんと仕事の割り当てがないと、作業の効率は落ちてしまう。自分のリーダーシップ不足と組織を動かす難しさを感じた。だが、みんなで協力して連日作業を行い、ついにテーブルとイスを完成させて中庭に設置したときの喜びは非常に大きかった。自分たちはもうすぐ引退し、エコ部も次の代に引き継ぐことになるが、エコキャップ運動等の活動をこれから先も続けてもらい、今の時代に沿った「エコ」という大きな課題に対し、自分たちなりに、前向きに取り組んでもらいたい。

関関同立交流会
二期目を迎えて

昨年度、我が学友会の呼びかけに、関西大学第一高等学校、同志社高校、立命館高校が応じて来られ、規約も採択して年四回の全体会議も先日二月七日で七回目を迎えた。この日の会合の内容は、各校の文化祭の紹介のためのプレゼンテーションが上映された。

まず皆の関心を引いたのは、同志社の各学年が独自に決めるという、クラス発表の形態。その多くは演劇発表会で学年ごとに発表日が異なり審査も行われるそうだ。次に関大の各クラスの紹介ムービーの上映会と、それとは別の日に出展される模擬店の華やかさ、さらには立命館の校舎内にある重厚な雰囲気を漂わす記念ホールを中心とした発表も活気がありそうだった。

ひと通りの発表が終わった後も質疑応答が活発になされ、関心の高さが伺われた。生徒の組織から予算に至るまで各校とも相当力が入っているようでお互いに大いに参考になるものであった。

この交流会の目的のひとつは、互いの活動の情報を交換して自校の生徒会活動の参考にすることであり、今回はその意味でも有意義な会合であった。次回の本会議は関西大学第一高等学校にて開催される予定である。年々着実に進歩を見せている本会の次の表情に期待したい。

新学友会発足

会長あいさつ

金城旼帝

いま、我が校は大きな転換期にあります。それは、「創立百二十周年」や、「共学化」などの数値上・事務上のことではなく、生徒一人一人の意識の転換期であるということです。

関西学院は、その歴史の重みと規模の大きさから、実にあらゆる類の評価を持つ学校です。私自身、外部中学の出身であり、受験生時代には本当にたくさんの噂を聞かされました。しかし、その内容はいつも千差万別で、人によってまるっきり違っていました。入学前はそれに大変困惑していた記憶がありますが、高校二年生となった今ではその訳がわかります。関西学院は、「関西学院」としか言いようがないからです。どのカテゴリにも属さない独特の校風がここにはあり、それは、一言で表現できるようなものではありません。その人の中にはその人だけの「関西学院」が創られるのであり、それこそが、我が校の魅力なのです。

しかし残念ながら、多くの生徒はその美しき伝統に埋もれすぎて、抜け出すことを億劫に感じてしまっています。私が今年度の最大目標を「体育祭復活」とし、それを目標にハウス制度の導入やクラス単位の意識改革を目指すのは、埋もれてしまった関学生をもう一度掘り起こすためです。それは悪いことでありませんが、この転換期にじっと土の中に沈んでいては時代の変化に意識が追いつくことが出来ません。「関学は関学である」という誇りは、高等部の気高き「自治と自由」の精神によってのみ確認されるのです。

私たち学友会の仕事は、手を泥まみれにしてでも土を掘り起こし、日の光が当たるようにすることです。それ以上のことは、もはや私たちが口出しをする領域ではありません。その人が足に力を込めたときにだけ、その人は歩き出せるのです。しかし、私は断言したいのです。関学生は、きっと立ち上がるということを。

二〇一〇年は、関学生の底力が試される年となるでしょう。まだまだ先は遠いですが、九百人一丸となって「伝統の、その先へ」勇気を持って歩んで参りたいと思います。

副会長あいさつ

岡田英士

僕の任期が始まってもう一ヶ月経ちます。最初は何をするべきかわからず、当然慣れないことがほとんどで、困惑しっぱなしでした。一ヶ月経った今でも戸惑うことばかりです。副会長として、どのような仕事をするべきなのか。自分に課せられている仕事は何なのか。宿題とは違う目に見えない課題に頭をかかえさせられています。

僕の中で特に戸惑っていることは、僕というキャラクターと副会長としてあるべきキャラクターがマッチするのだろうかということです。違う言い方をすれば僕に副会長になるほどの器があるのかということです。何か問題にぶつかる度にそう思います。しかし、副会長になったからにはこのような事は言っていられません。ですから、僕にできる最大限のことをして行こうと思います。

これから新年度が始まろうとしており、学友会も本格的に動き出します。副会長として、恥じる事のないよう一所懸命に仕事を全うしますので、足りない面もあると思いますが一年間よろしくお願いします。

◆剣道部
新人戦 優勝
全国選抜へ

剣道部は、八月に新チームに移行しました。兵庫県民大会は準優勝、私学大会は三位、でいずれも須磨学園に負けていました。そして迎えた兵庫県新人大会（全国選抜予選）、高等部剣道部は九年ぶり二回目の優勝を果たしました。

十一月十四日、高砂市総合体育館で行われた大会では、四回戦雲雀丘まですべてストレート勝ち。準々決勝、滝川第二に三―〇、準決勝、報徳に三―一と勝ち進み、決勝戦に進出しました。相手は、また須磨学園でした。先鋒一本勝ち、次鋒引き分けでリードしますが、中堅二本負けで逆転されます。副将戦は時間終了間際に、起死回生の小手が決まり再びリードし、大将戦も一本勝ちで、三―一で勝利しました。

そして兵庫県代表として、三月に行われる第十九全国選抜大会への出場権を獲得しました。全国選抜大会は三月二十七日、二十八日、愛知県春日井市の総合体育館で行われます。昨年、一昨年と兵庫代表の育英が準優勝をしています。関学も兵庫県代表として、恥ずかしくない試合できるよう頑張りたいと思います。

◆陸上部
躍進の予感

夏休みに行われた県ユース大会（学年別）で二年山根が一一〇mH（ハードル）で優勝、一年前田も三位となり近畿大会出場を果たした。学年共通の四×一〇〇mリレー（二年山根・針谷・岩崎・佐浦）は四位に入賞した。九月の近畿ユース大会においても山根は一一〇mHで一四秒六七の好タイムで近畿のチャンピオンとなり、さらに十月、山梨で行われた日本ジュニア・ユース大会においても第二位という輝かしい成績を収めた。

また、近畿選手権大会の出場権を得た三年伊東、二年山根・針谷・岩崎は、このメンバーとしては最後となる四×一〇〇mリレーに出場した。

新人戦にあたる阪神高校選手権では、ユースと同メンバーでの四×一〇〇mリレーで第一位、四×四〇〇mリレー（二年針谷・岩崎・西山、一年清水）二位、二年佐浦が三段跳二位、二年藤谷は走り幅跳一位、針谷は走り幅跳、一〇〇mで共に三位、一一〇mHでは山根が一位、前田が二位となり、さらに初挑戦の八種競技で山根が大会新記録をマークし優勝、その高い競技能力を十二分に発揮した。総合でも第二位となり来季に大きな希望が持てる新チームの滑り出しとなった。

なお、山根は二月に日中ジュニア大会に陸上競技連盟推薦選手として出場する。

◆アメリカンフットボール部

「立命にリベンジ、そして日本一」、それのみを考え、練習し、苦しい夏を越え、秋を迎えた。関西大会一回戦は、VS立命館宇治。勝つことを信じて、冷たい雨の中、選手たちは走り、ヒットし、声を出し続けた。あきらかに春よりも、輝いた、粘りを見せるFightersがいた。

しかし、先取点を許し、膠着状態が続き、そのままタイムアップ。七―〇で敗戦。結果は無常なもので、それまでの努力や困難は、その日実らなかった。

「負けたけれど、よく頑張った。」選手たちにそんな言葉は、届かないかもしれない。けれど特に三年生、よく覚えておいてほしい。大切なのは今からということ。君たちが流した汗や、涙が輝くときが、いつか必ず来るということ。

たとえどんな道を歩んだとしても、かけがえのない時間と空間を糧に、次の一歩を踏みしめてしいと、心から願っている。

改めて、三年間、お疲れ様でした。

◆テニス部
9年連続
全国選抜へ

三月二十一日から福岡県博多市の博多の森公園で第三十二回全国選抜高校テニス大会が開催される。この大会に高等部テニス部が九年連続の出場を果たした。昨年十月の兵庫県大会では、昨年全国大会第三位の甲南高校に会場の誰しもが予想しないような大逆転で勝ち、十一月の近畿大会でベスト4に進んで獲得した選抜の切符であった。昨年、一昨年の大会は一回戦で涙を呑んだ。今回は初戦必勝の心意気に部員たちは燃えており、スキー旅行を返上しての猛練習に取り組んでいる。主将の藤は昨年十二月の兵庫県ウィンタージュニア選手権十七才以下で念願の初優勝をとげ、チームに勢いをつけている。これに河野、山本、田中ら二年生と、玉城、羽禰田、岩佐、芳田、垣内ら一年生を加えて総力戦で一回戦突破に全力を尽くす構えだ。監督の松田先生からも今年こそ勝ち名乗りを受ける気合がひしひしと伝わってくる。野球部の甲子園での活躍に勇気をもらって、九州では精一杯力を発揮してもらいたい。

◆水泳部
国体出場

インターハイ出場結果
四〇〇M自由形　斎藤寛弥
二〇〇M自由形　斎藤寛弥
五〇M自由形　福島友輝
四〇〇Mリレー　斎藤寛弥・福島友輝・世良幸久・戸田優太

ジュニア水泳競技大会結果
一〇〇M平泳　和田真哉一位
二〇〇M個メ　長谷川奨三位
四〇〇M自由形平田和紀七位
一〇〇Mバタ　池奥　凌二位
二〇〇M個メ　濱中英泰四位
一〇〇M平泳　井上翔太五位
男子総合　五位
また、斎藤寛弥が国体出場。

◆卓球部

十月の阪神予選を二位で通過して県大会を迎えた団体戦は、三回戦で強豪育英高校に善戦するものの〇―三で敗れ、近畿大会出場は翌日の八校で一つの枠を競う決定戦に持ち越された。一回戦は三―〇でストレート勝ち、二回戦は三―二で逆転勝利。いよいよ近畿大会出場の切符をかけた三回戦。相手は明石北高校。一番手のシングルスとダブルスを落とし、二・四番手をとって勝負となった五番手は善戦したが、セット数二―三で正に惜敗、近畿大会出場は次の総体までお預けとなった。

◆サッカー部

サッカー部は昨年十月十四日から行われた全国高校サッカー選手権兵庫県予選で三回戦・三木高校に一―〇で勝利しましたが、続く準々決勝で報徳学園に〇―三で敗れ県ベスト8でした。この大会で三年生は引退となりました。サッカー部を支えてくださった保護者の会を初め、OB会、学院の皆様に感謝いたします。

また、昨年十一月より県U18トップリーグが行われています。結果は兵庫県サッカー協会HPにアップされています。

昨年十二月末から行われた新人大会阪神地区予選は一月十日に報徳学園と決勝戦が行われ一―一（PK五―四）で勝利し優勝しました。一月三十日より県大会が西播地区で行われ、県ベスト16でした。

◆柔道部

今年の七月より新チームになり市民大会二位、阪神大会一回戦、尼崎稲園に三人残しで勝ったものの、二回戦報徳高校に四人残しで敗れ、敗者復活戦では再び尼崎稲園に四人残しで勝利し、県大会に出場しました。

県大会では灘高校に四人残しで勝つも、市川高校に二人残しで敗れしまいました。個人では八十一kg級で高山がベスト16という結果でした。冬休みには多くの高校で練習試合を行い経験を積みました。総体では絶対に二日目に残りたいと想います。これからも応援よろしくお願いします。

◆バレー部

二〇〇九年八月
○県私学大会　ベスト八
（近畿私学大会出場）
二〇〇九年十月
○新人大会阪神予選
ベスト八（県大会出場）
二〇〇九年十一月
○県新人大会ベスト三十二
二〇〇九年十二月
○近畿私学大会　四部三位
二〇一〇年一月
○選抜優勝大会県予選
ベスト三十二

◆バスケットボール部

バスケットボール部は二月、第六十二回兵庫県新人選抜大会に出場した。二回戦で神戸高塚高校を、三回戦で三田高校を破りベスト4へ進出した。

二月七日準決勝の対戦相手は、宿敵・神戸科学技術高校だった。前半に苦戦したものの後半の粘りで逆転し、八十二―六十七で勝利した。その勢いで決勝戦・対育英高校戦に臨んだが五十六―七十九で惜敗。兵庫県二位におわった。チームは続いて二月二十日から近畿大会に出場する。

◆ゴルフ部

主な業績
兵庫県高等学校ゴルフ選手権で、酒井将輝が五位、高橋成輝が七位
兵庫県高等学校ゴルフ競技会阪神支部大会・個人の部で鬼頭哲平　四位、酒井将輝　七位、高橋成輝　九位。同大会団体の部で二位。
兵庫県高等学校新人ゴルフ競技大会で酒井将輝　十一位タイ、苅谷厚貴　十八位タイ、高橋成輝二十四位タイ、団体で六位。

◆ラグビー部

チームにとって貴重な成長をする時期であるはずの夏休み、例年通り菅平合宿を行った。しかし、悪天候やインフルエンザのため、キャンセルが続き、しかも早めに打ち切り。春の大会も中止されたため、どこか消化不良のままシーズンを迎えた。

決勝までの三戦は順当に勝ち上がり、そして迎えた決勝は報徳戦。報徳の力強いプレーにリードを許し、前半は七―十九。しかし、なんとか粘り強く耐え、五点差に追い上げる。そして後半ロスタイム、あと少しでトライというところまで怒濤の攻撃。たくさんの歓声に後押しされた攻撃も、関学の反則でノーサイドとなった。観ている人にひたむきさやあきらめないこと、多くのものを伝えた試合であったが、何かが足らなかったのも確か。この負けを受け継いで、新チームがスタートする。

■ヨット競技
国体で一位

私たちヨット競技は六月に琵琶湖で開催された近畿総体において、ソロ競技（個人）で西尾・中川組が一位、小森・俣江組が三位。デュエット競技（団体）で一位となりました。そして八月に和歌山で開催された全国高校総体において、ソロ競技で西尾・中川組が六位、小森・俣江組が二十一位。デュエット競技で三位となりました。その後、一〇月に行われた新潟国体では兵庫県代表として出場した西尾・俣江組が一位となりました。

このような結果を残せたのは、私たちの努力だけでなく、先生方や生徒たちの愛情のおかげです。炎天下の中、遠い試合会場まで足を運んで頂いた先生。「今度の試合がんばれよ！」や「優勝おめでとう！」と声をかけてくれた先生や多くの友達。これらの行為や言葉によって私たちは支えられていました。その方々に大変感謝しています。ありがとうございました。

■スケート競技
一年横山君活躍

一年生の横山大希君はスピードスケート・ショートトラックで活躍している選手だ。小学四年生から始め、中学二年生の時にはアジア大会に出場し三位に輝いている。一般のスケートクラブに所属して今も毎日ハードな練習を欠かさず、今年度は全日本ジュニアで、一五〇〇m四位、三種目総合五位になったほか、国体では一〇〇〇mで三位に入賞している。

ウインタースポーツには北国出身の選手のイメージが強いが、ショートトラックは関西も高レベルだという。種目特有の、追い抜くタイミングなどの駆け引きがおもしろいと語ってくれた横山君の近い目標は三月の全日本選抜での上位入賞、高校時代の目標は世界ジュニア出場だという。

●コンピューター部

一学期はP検（パソコン能力検定試験）の資格取得を目指し模擬試験等を実施。八名の部員が準二級を取得しました。二学期は文化祭でクイズや用語説明等の展示の他、自作ゲームのCDを合計二百五十枚配布し、アトラクション部門で二位を受賞しました。中（三年）が編集した文化祭パンフレットも好評でした。また、学友会サイトも定期的に更新しています。来年度は部員と顧問が減ってピンチです。興味がある人はぜひ入部を！

●吹奏楽部

我々吹奏楽部は、昨年の夏のコンクールでは銀賞を受賞、インフルエンザの影響により文化祭での演奏はなくなりましたが、ここ関西学院高中部礼拝堂で行われました第二十一回西宮市高等学校吹奏楽連盟定期演奏会での演奏や、育友会のクリスマスでの演奏と、幅広く活動してきました。

また、昨年十二月に開催されました西阪神アンサンブルコンテストでは、金管五重奏とサキソフォン五重奏が共に金賞を受賞、今年一月に開催された県大会では金管五重奏は銀賞、サキソフォン五重奏は銅賞を受賞しました。

現在は、四月十八日に行います第九回定期演奏会にむけて、みな一丸となり練習に励んでいます。今年は新たなステージに挑戦しようとしており、今まで以上の高い意識と団結力が必要とされています。

精一杯頑張りますので、これからも吹奏楽部をどうぞよろしくお願いします。

部長　夏目友樹

●写真部

写真部は部員わずか四名で、全員が他の文化部との兼部である。それでも、他の活動をいい刺激としながら日々活動を続けている。夏季には沖縄県・竹富島へ撮影に出かけた。秋季の県阪神地区写真コンテストでも、数多くの応募のなか出品者全員が県コンテストに進んだ。そして、二年富加見君が竹富島で撮影した作品が、来年度八月に宮崎で行われる総合文化祭に出展されることが決まった。文化祭では美術部・映画部と合同で「芸術回廊」という展示に取り組み、手応えを得ていた。今後は、新入部員の獲得に力を注ぎたい。

●グリークラブ

去る一月三十一日、川西市みつなかホールにて、第四十七回ファミリーコンサートが行われました。このコンサートをもって、第六十二代グリークラブの活動は終了し、翌日二月一日から、部長野口、副部長田中、指揮者木本が率いる第六十三代グリークラブが始動しました。今後の活動としましては、四月の中之島音楽祭、六月には兵庫県合唱祭の出演などが決まっており、またコンクールの全国大会を目指しての練習も始まろうとしております。先輩方が作り上げた伝統に恥じぬよう、練習を積み重ねていきますので、今後もグリークラブを応援よろしくお願いいたします。

部長　野口尚樹

●文化総合研究サークル

今年度の文化総合研究サークルの成果は、まずアメリカのUndergraduate Mathematics Journalに論文を三つ掲載しました。これは優れた大学生レベルの研究を掲載する雑誌です。名門大学の学生達と並ぶことができ、名誉です。また、セルビアのVismathという雑誌に論文を三つ掲載しました。これは数学と芸術の接点を求める雑誌です。東大の地震研究所の人たちの論文と並んで掲載されています。京都大学数理解析研究所の雑誌の考究録にも論文を掲載し、国際学会であるthe 9th Asian Symposium on Computer Mathematicsについては論文審査に合格し、研究発表と論文掲載を果たしました。また、イギリスの数学専門誌Mathematical Gazetteでは三月に論文が掲載されます。高校生レベルの業績としてはカナダの科学フェアで三年連続の金賞を得ました。

インフルエンザ流行
高等部にも影響
生徒のおよそ半数罹患

今年度、全世界的に多方面に影響を与えている（新型）インフルエンザであるが、高等部も大きな影響を受けた。

五月には県からの指示により一週間の休校措置がとられたが、世界的な流行の懸念から、夏休みに予定されていた英語研修旅行とゴルフ部の海外遠征（ともに行き先はオーストラリア）が中止された。

また、夏休みにも各クラブにおいて罹患者が発生し、二学期の感染拡大が懸念された。

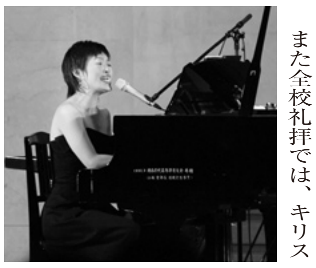
その二学期、実際に特定のクラスに、急な発熱などインフルエンザ及びその疑いとみられる欠席者が続出するケースが見られ始め、結局九月中旬から十一月中旬にかけて断続的に、のべ八クラスが学級閉鎖、一年生が学年閉鎖一度の措置をとった。結局、昨年だけでのべ四百五十名を超える罹患者が発生し、罹患率は五十％に迫った。なお、学年別では一年生・二年生ともに五十四％で、三年生の三十四％とは差がみられる。

罹患者が急増した十月末は文化祭の時期と重なり、文化祭の一般公開はその前日に決定されることになった。結果、チャペルステージやライブハウス等、人が室内に密集する企画を除外して縮小開催することとされた。

なお、幸いにも重症化する生徒・教職員はなかった。

秋季宗教運動とキリスト教音楽コンサート

十月十九日～二十三日、秋の宗教運動が行われた。学年礼拝の講師は佐藤英和先生。「十一ぴきのねこ」や、「わたしのワンピース」などで有名なこぐま社の会長である。主題は「自分が自分であること」。先生は、「ちいさいおうち」、「花の好きな牛―フェルディナンドのおはなし―」、「時計つくりのジョニー」、これらの絵本をスライドに映しながら読み聞かせをして下さった。小さい頃、父に母に、読み聞かせをしてもらったであろうこれらの本を、思春期の今改めて読み聞かせてもらう体験は生徒たちにとってかけがえのないものになったと思う。また先生から、「みんなちがってみんないい」や「そのままのあなたでいい」という言葉が本能のままに生きることと勘違いされている現代において、「自分が自分であること」は、神の呼びかけに応えることの中にあるというメッセージを頂いたことは、将来へのビジョン、職業選択に直面している生徒たちにとって、大きな示唆となった。



また全校礼拝では、キリスト教音楽コンサートとして、沢　知恵さんに、オリジナル曲「それだけで美しい」をはじめ、MONGOL800の「小さな恋のうた」など、生徒たちのお気に入りの歌もまじえてメッセージを頂いた。当日、インフルエンザによる欠席、体調不良者が多かった一年生に参加を遠慮してもらったことは、本当に残念だった。沢さんへの謝辞として、宗教総部長の中村知斉君は、「沢さんの歌やメッセージには、強い意志を感じる。自分も強い意志をもってこれからの人生を歩んでいきたい」と感謝の言葉を述べた。沢さんの姿から「自分が自分であること」を生徒たちは学んだように思う。

芸術観賞

桂三枝師匠 笑福亭福笑師匠 笑福亭たまさん をお迎えして
落語の世界を楽しむ

二〇〇九年十一月二十日。ついに桂三枝師匠が関西学院高等部にいらっしゃった。

毎年恒例の秋の芸能鑑賞会。今年は「上方落語」。前座は笑福亭たまさんによる「時うどん」。枕でお得意の「ショート落語」を披露し生徒達を巧みに落語の世界へと引き込んだ。たまさんは、京都大学出身の気鋭の落語家さんである。

続いてこの学校寄席の世話人でもあり、たまさんの師匠になる笑福亭福笑さん（写真）の登場。御自身の創作落語「もうひとつの日本」を演じてくださった。次に、笑福亭生寿さん、三味線の林家和女さん（林家小染さんの奥様にして桂あやめさんのお姉様）が加わり「鳴り物解説」をしてくださった。落語の出囃子などの説明をわかりやすくしてくださった。

最後に登場されたのが上方落語家協会の会長もされている桂三枝師匠である。TVの「新婚さんいらっしゃい」でもお馴染みの大物ゲストの登場に生徒達からどよめきが起こった。

枕で芝川先生との懐かしいお話など取り入れながら、お得意ネタの「宿題」を披露。「つるかめ算」に苦しむ親子の楽しく滑稽な話を見事に演じられ生徒達を存分に落語の世界へと導いていかれた。なお、この日の様子は三枝師匠のホームページ「いらっしゃーい亭」でも紹介されている。

英語ディベート大会
初挑戦も大健闘

第三回兵庫県高校生英語ディベートコンテストが〝All secondary schools in Japan should abolish school uniforms〟という論題で一月三十一日に行われた。十八校の参加があったが、関学から三年中山、友繁、青木、池田のチームが初出場した。

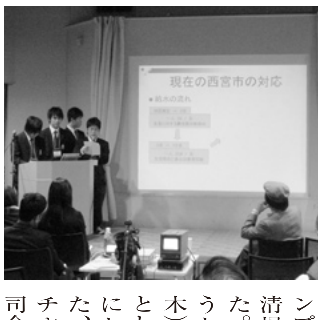
初戦は関学と同時期にSuper English Language High Schoolに指定され、ディベートにも力を入れている三木高校と対戦した。準備期間が少なく、初参加でディベートの技術を磨く時間もなかったが、参加者は全員二年次にEnglish Intensiveでミニディベートを経験しており、また男子だけのチームは関学と灘だけでその勢いと持ち前の英語力、チーム力で勝利を収めた。

予選の結果は二勝一敗で、初出場ながら見事決勝ラウンドに進出したが、準々決勝は予選で敗れた芦屋国際中等教育学校との再戦となった。肯定側、否定側も前の試合と同じで、関学は否定側として試合に臨んだ。相手校は毎年参加し、各大会でも優秀な成績を収めている学校であったが、関学チームも相手の攻撃を見事に跳ね返していた。結果はわずか一点差での敗退となったが、審査員によれば論理的な構成では関学側が圧倒していたそうである。

芦屋国際は昨年の優勝校、葺合高校を破り優勝したが、その学校と五分に渡り合った関学は大健闘で、参加者にとっても三年最後のいい思い出となった。

アジアユースサミットに参加
～アジアの高校生と共に～

十一月二十日より四日間、奈良県において第一回アジアユースサミットが開催された。同サミットは社団法人JAFS主催の元、アジア六ヶ国（インド、タイ、中国、ネパール、バングラデシュ、フィリピン）と日本の高等学校五校が参加。関西学院からは高等部の三年生四名（青木嵩・池内俊介・金岡厚志・八木淳一）が今回のテーマである「水と生活」に対し、「阪神淡路大震災」に焦点を当ててプレゼンを発表した。（写真）



二日目と三日目にはグループに分かれてディスカッションを行った。ここから出た結論を最終日に一つのアクションプラン「各国における川の清掃と改善」としてまとめた。この際、高等部生四名のうち三名（青木、池内、八木）がアクションプラン委員として司会進行、再議、採択において中心となった。また、二十二日に行われたカルチャーナイトでは金岡が総合司会としてインドからの女子生徒とともに会を盛り上げるなど、企画の随所で高等部生の活躍が目立った。

図書館だより
図書館展示へのおさそい

高等部図書館に入る直前、目に飛び込んでくる景色がすぐに思い浮かびますか？

二〇〇九年がガリレオの望遠鏡による宇宙観測から四百年の「世界天文年」だったので、昨秋から天文学の歴史や日本の宇宙飛行士など関係の図書館資料や写真のパネル展示をしています。昨年は「太宰治・松本清張生誕百年」、第一回登録から三十年の「世界遺産」、食品偽装事件が相次いだことを受けた「食」もテーマに取り上げました。

二〇一〇年と聞いて何を思い浮かべますか？現在予定している今年のテーマは「平城京遷都千三百年」「阪急電鉄百周年」、年末の十二月八日に三十回忌を迎える「ジョンレノン」などを考えています。生徒のみなさんからのテーマの提案も大歓迎ですよ。

スタッフ手作りの展示で年月や季節の移り変わりを感じてもらえたらうれしいです。

二年生 進路ホームルーム
各界で活躍される先輩方を迎えて

一月二十三日（土）に二年生は進路ホームルームを実施しました。始めに基調講演として、弁護士で関西学院大学大学院司法研究科の池田直樹教授にお話をしていただきました。弱者に寄り添って支える立場から、学院のモットーにもつながる有意義な講演を聞かせていただきました。約一時間のお話の後、分会に分かれて高等部卒業の社会で活躍されている様々な職種の社会人のお話を身近に聞く機会を持ちました。弁護士の三村さん、公認会計士の森さん、教員の起須さんと河原田さん、関西電力の加宮さん、電通で広告プランナーの鈴木さん、大和コンピューターでシステムエンジニアの森さんをお迎えして、中身の濃い充実したお話をしていただきました。分会の講演が終わった後も、生徒のほうから色々な質問をしている光景も見られました。いよいよ三年生に進級します。学部選択をしていくうえで、意義深い一日を過ごせたことを喜んでいます。

イギリス留学だより

英語科　西室雅央

昨年から英国のリーズ大学大学院教育学部で英語教授法を学ばせていただいています。教育学部には世界二〇カ国以上から幅広い年齢層の学生が集まっており、人と価値観が実に多種多様です。ナイジェリア人は「生徒一五〇〇人にペアワークをさせたら大混乱だ」、韓国人は「日本以上に大学入試用の試験対策が大変でコミュニケーション英語どころではない」、オマーン人は「国のカリキュラムに縛られて教科書も選べず教えたいことがあっても時間的に全くできない」等、各国の常識が存在し、改めて日本、関学の常識はいい意味で非常識だなと感じています。教授陣には「日本はまた英語のカリキュラムを変更するね。で、意味があるのかい？」と刺激的な挑発をされます。自分が勉強、経験したことが一度ひっくり返り、古いものと新たなものが自分の中で再構築されていく、まさに留学の醍醐味を日々味わっています。

英語教師ながらも当初はリーズの英語のきつい訛（日本語でいう東北弁のような感じでしょうか）に大変苦戦しました。同じイギリス人も冷やかすぐらいの独特なアクセントです。さらには、各国のバラエティ豊かな英語に慣れるのにも時間がかかりました。英語使用者が約一五億人と言われている内、英語母語話者よりも非母語話者の数が二～五倍多いと推定されています。インド人の英語は早くて抑揚がなく、フランス人や中国人の英語は空気がたくさん入っていてぼやけていて、ロシア人は一息が長いため文に切れ目がなく、日本人の英語はみなさんがご存じの通りです。個人差も加味すると、正にとてつもないWorld Englishesを体感しています。

生活上のハプニングは数え上げるときりがありませんが、金曜のお昼を回るとすでに週末モードに入りパブで飲みだす英国にいると、まぁなんとかなるさ、という気持ちにさせられます。プレミアリーグのライブが始まると、心配事が吹っ飛び熱狂の渦になります。そして結果的になんとかなるので不思議です。大学の中には2つパブがあり、授業の内容等をビール片手に喧々諤々しています。生真面目な日本人には最高のいい加減さです。

リーズ大学の言語学部には日本語学科があり、多くの学生が二つ目の専攻として履修しています。そのプログラムでは一年間の日本の大学への留学が組み込まれています。驚くのは彼らの日本語のうまさです。「どうやって勉強したの？」と日本から帰国した英国人学生に話を聞くと、「日本語はムズイって言われるけれど、要は上手くなりたいっていう思いとそれをやり遂げる覚悟とやるかやらないかでしょ。ほら、この単語帳すごいでしょ？」と日本語で、忘却曲線理論に則ったankiというPC用の日本語学習ソフトを紹介してくれました。〝Study hard, but play harder.〟その学生が教えてくれた印象的な言葉です。

四月には幸いにも近くの街で大きな学会があるので、参加して見聞を広めてきます。このようなエネルギーと刺激に溢れた環境の中で留学させていただいていることに深く感謝しつつ、更に研鑽を積みたいと思います。